

六花の輝き

<教育目標>

喜んで登校し、
生き生きと学ぶ子ども

〒943-0805 上越市木田3-1-25
TEL 025-523-3858 FAX 025-525-7188
E-mail takashi@jorne.or.jp

どうやって叱ったら

校長 遠藤 和英

あたり前ですが、子どもたちは現在成長中です。ですから普段過ごしている中で、間違ってしまうこともたくさんあります。そのとき私たち大人は、適切に叱ることが必要です。この適切に叱るということは、実はとっても難しいです。私も決して自分で叱り方がうまいとは思っていないのですが、叱り方について以前考えたことを紹介します。

それまで、私が心掛けていたことと言えば、「理由が相手に伝わるように叱る」「傷つけ過ぎない言葉を選ぶ」「行為を叱っても人格を否定しない」「一呼吸置いて、冷静に叱る」「ぐじぐじと長い時間叱らない」・・・など、一般的なことです。しかし、いざその場面に出会うと、上手に叱るのは難しいと感じることが多かったです。特に自分の息子を叱るときは、なかなか冷静になることができず、怒りにまかせて叱ってしまうこともたくさんありました。

そんなとき、あるカウンセラーが書いた文章に出会いました。そこには、叱るというのは、本来「反省を促す」ことが目的である。だから、子どもが反省をしてくれるのなら、叱る必要はない。つまり、上手に叱る方法は、正確に言うと叱らないで子どもが自ら反省するように促すことだ、と書かれていました。

では、どうしたら子どもに反省を促すことができるのでしょうか。その方法を知る前に、意識しておかなければならないことがあるのだそうです。私たち大人が叱るときは、だいたいは怒ってイライラ、ムカムカしています。しかし、「怒る」の感情の裏には、「もう一つの感情」が必ず存在します。この「もう一つの感情」は、ほとんどの場合「不安・悔しさ・寂しさ・悲しさ・期待はずれ」。

<例1> 飛び出して車に引かれそうになる

↓
不安 (←もう一つの感情)
↓
怒る

<例2> なかなか家に帰ってこない

↓
心配 (←もう一つの感情)
↓
怒る

この「もう一つの感情」が原因で、次に怒りが発生します。つまり、この「不安・悔しさ・寂しさ・悲しさ・期待はずれ」が本当の感情で、「怒り」は二次的な感情です。ですから、子どもに反省を促すためには、「怒り」をぶつけるのではなく、この「もう一つの感情」を伝えるのだそうです。

<例1>の場合なら、「もう驚かせないでくれよ。〇〇がもし車にひかれたら、父さんは悲しいし、寂しいよ。もうこれからは飛び出さないでくれよ。」、<例2>の場合なら、「どこへ行っていったの？母さんはとっても心配したんだから。辛かったんだからね。」という感じで、「驚いた」「悲しい」という想いを子どもに伝えるのだそうです。このように心で感じたこと（怒り以外）を正直に感情を込めて伝えると、怒りをぶつけながら叱るより、よほど効果があると書かれていました。

この文章を読んで、なるほどそういう考え方もあるのだなと感じました。それから、怒りを前面に出して叱っていた自分を反省し、「どうして自分は今こんなに怒っているのだろう」と怒りの後ろにある感情に少しずつ目を向けられるようになってきました。そして、「今日は比較的冷静に息子を叱ることができたな」という日も出てくるようになりました。また、叱る回数も、以前よりは少なくなっていくような気がします。保護者の皆様はいかがでしょう？

とはいうものの、上手に褒めること同様、上手に叱ることも難しいです。これからもどうやったら上手に褒めたり叱ったりできるか、一緒に考えていきましょう。